

# モース・コレクションの初期の形成過程 —モース自筆収集目録より

小 山 周 子\*

## はじめに

本稿では、米国ピーボディ・エセックス博物館フィリップス図書館所蔵のモース文書（Edward Sylvester Morse Papers）の中に保管される、エドワード・S・モース自筆の収集目録を取り扱う。モース自筆の収集目録の存在については、先行の研究においてすでに紹介がなされる場所であるが、その詳細については語られてはいない。本稿にて目録の経緯を明らかにするとともに、書かれた内容から本調査報告書内のモース・コレクション目録を一部補完する。さらにモースの『日本その日その日』との合致点を探す試みにより、1882年（明治15）から1883年にかけての3度目の来日における博物館のための資料収集の実態について、協力者も含め足跡を明らかにしたい。

## 1 モース自筆収集目録について

1882年のモースの博物館のためのコレクション収集に関しては、すでに故守屋毅氏によって『共同研究 モースと日本』<sup>1</sup>の中で、2つの資料を明らかにされている。一つは、ピーボディ科学アカデミーの『年報』に収録されたモースによる「館長業務報告」<sup>2</sup>で、日本とその他の地域で行った博物館のための収集活動をまとめた報告書である。守屋氏により、前掲書に報告の全文が翻訳される<sup>3</sup>。この「館長業務報告」の記述は貴重で、モースの日本滞在記『日本その日その日』にそれほど多く書かれることはなかった、博物館のための収集の実態と経緯を明らかにする内容である。『日本その日その日』の3回目の来日の記述は、むしろモース自身の陶器コレクションの収集や人々との交流に重点が置かれ、博物館のための収集に関しては断片的に書かれるにすぎない。

守屋氏がモース・コレクションの形成のもう一つの重要な資料として明らかにされたのが「モース自筆収集目録」で、27枚の便箋に収集資料をリスト形式で書き記したものである<sup>4</sup>。守屋氏が把握されたのはスクラップブックに貼付された2種類の目録で、「一部はアカデミーに提出したリスト、もう一部はモースが手びかえとして手もとに置いたもの」という。さらに註にて、「その後の筆者の調査によれば、同種の目録は、さらに別に何種類か存在する。ここで扱っているのは、清書本というべきものであり、その成立には、さらに検討を必要とする」と書かれ、数種類の自筆収集目録が残されることを指摘

---

\*東京都江戸東京博物館学芸員

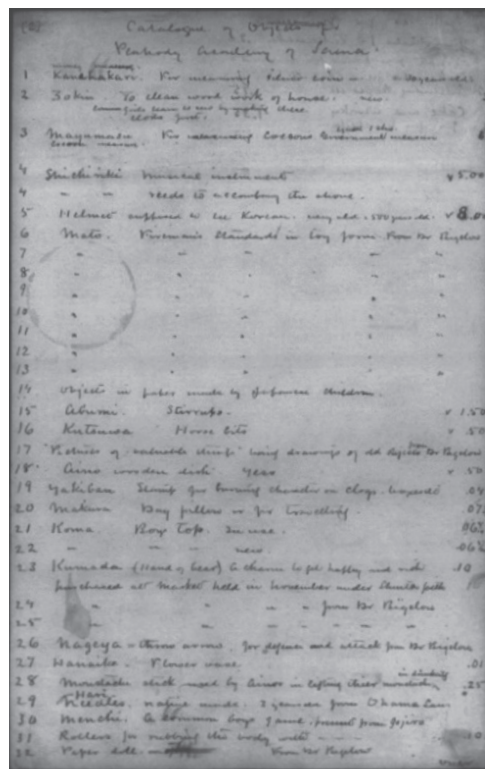
される。残念ながら氏の調査研究の後、モース自筆の収集目録についての説明は進んでこなかった<sup>5)</sup>。

本稿で扱う「モース自筆収集目録」(以下、「本目録」という。)とは、フィリップス図書館所蔵のモース文書の中に保管されるもので、同館のEdward Sylvester Morse Papersの中のⅢ. ScrapbooksのFile Box40 Folder1にあるCatalog of Objects for Peabody Academy of Science, circa 1882<sup>6)</sup>のことである。残念ながら筆者はそれ以外の目録については調査できていない。本目録(【図1】)は、前掲書に写真掲載される「モース自筆の収集目録(モース文書より)」<sup>7)</sup>とは明らかに異なる。目録のタイトルも守屋氏掲載が「Catalogue of Ethnological Objects for the Peabody Academy of Science JAPAN」(ピーボディ・アカデミーのための民族学資料目録 日本)に対し、本目録は「Catalogue of Objects for Peabody Academy of Science」(ピーボディ・アカデミーのための資料目録)である。本目録は、ページ番号は28までであり、その点も異なる。さらに、誤記について線を引いて簡便に修正した形跡や、簡単なスケッチや漢字の記載、収集のメモ<sup>8)</sup>も見られることから、守屋氏指摘の「別に何種類か存在」する中でも最も早くに作られた目録ではないかと考えられる。全ての資料ではないが、米国に送る際の関税の計算のための金額が記入される点<sup>9)</sup>も、本目録が1882年から1883年に日本にて書かれた可能性を示唆する。

本目録は、資料1点につき原則1行で記され、番号、日本語資料名(ローマ字表記)、英語名や資料の説明、収集元(協力者名)、金額で構成され、日本語資料名がないものが見られ、金額は記載がないものが多い。リストの番号は1から821までで、529から639は書き手がモースとは異なる。また、日本で収集した資料は、1～683と721～724で、守屋氏が検証された目録と、番号及び日本コレクション点数687点の相違はない。以上の本目録の概要は【表1】のとおりである。

【表1】本目録の概要

番号	目録記入者	ローマ字表記の日本語資料名	収集地
1～528	モース	あり	日本
529～639	別人による記入		
640～672	モース	なし	中国・上海
673～683			
684～720			
721～724			
725～821			中国～東南アジア



【図1】モース自筆収集目録(本稿で扱う目録)  
ピーボディ・エセックス博物館フィリップス図書館所蔵 PEM Collection

本目録の番号は、日本コレクションに関して、ピーボディ・エセックス博物館の通称Eナンバーとほぼ一致する。EナンバーのEは、Ethnology（民俗学）の頭文字をとったものである。すなわち、本調査報告書内のE番号順のモース・コレクション目録内容（P.57～125）と821番までに関しては、概ね一致する内容である。つまりモースが1882年から翌年にかけて博物館のために収集した資料は、アジア地域821点そのうち日本収集品687点で、帰国後、整理を行いつつ且つ収集活動も続けた結果、現在に至る博物館のモース・コレクションが形成されている<sup>10</sup>。

目録の529から639の書き手については、不明である<sup>11</sup>。該当の番号の資料は、武具商・町田平吉から寄贈の武具関連コレクションで、町田の関係者による代筆かもしれない。また、日本語資料名は672まで付与されている。モースの「館長業務報告」には、竹中八太郎氏が全ての収集品の日本名を確認したとある<sup>12</sup>。673以降の日本収集品は、集めたものの日本の出国間際あるいは輸出作業に伴い、竹中の確認作業が間に合わなかったものだろう。684以降は、日本を出国した後の上海、香港、広東、安南のチョロン、シンガポール、ジャワで集めた資料群であるが、それら資料は日本コレクションではないため当館の調査では確認できていない。モース・コレクションの全容を知る上では、この時期の貴重なアジア地域の資料についても、いずれ調査の対象とすべきであろう。

## 2 モース・コレクション目録の補完

本調査報告書内のモース・コレクションの基礎調査は、2013年9月14日（土）から同年12月8日（日）まで開催の当館特別展「明治のこころ—モースが見た庶民の暮らし」展の準備過程で行ったものだ。コレクション目録の番号はE1からE77590までで、収集地が日本に限ったコレクション内容であり、モース没後の遺贈や、家族と友人からの寄贈なども含まれる。この成果は、同博物館の通称「Eカード」と呼ばれる資料カード調査がもととなっている。そのため調査者側である我々の見落としや調査を開始した当初のコレクションへの理解不足、残念なことにさらなる追加の調査が2021年度の時点においてできていないことに起因して番号に抜けがある。あるいは再整理の過程等のなかでの欠番、カードの欠落等による可能性もあろう。その欠如した番号の収集品（E724まで）について、自筆目録により簡便ではあるが【表2】で補完してみたい。ただし、モースが作成した目録からの補完であって、Eカードの調査と同様、現在の博物館の収蔵品と照合したものではない。

【表2】において自筆目録の番号とEナンバーが異なるのが、目録の667から673までの生き人形である。モース・コレクション目録から、E16304が1915年（大正4）、E16313が1916年1月の受入れであることから、1915年から1916年初頭にこの生き人形7体についてEナンバーが再付与されたと推察される<sup>13</sup>。

【表2】モース・コレクション目録の補完

自筆目録の番号	推定される 博物館Eナンバー	資料名	寄贈者、関連資料等
15	E15	鐘	
17	E17	[古い物の絵画]	ビゲロー
24 ~ 25	E24 ~ 25	熊手	E23関連資料
27	E27	花瓶	
32	E32	紙人形	ビゲロー
50	E50	櫛箱	
60	E60	鬻入れ	E58 ~ 59関連資料
136 ~ 137	E136 ~ 137	日本で収集した朝鮮の民具資料	
146 ~ 148	E146 ~ 148	日本で収集した朝鮮の民具資料	
153	E153	刺股	町田平吉
155 ~ 158	E155 ~ 158	袖搦、槍など武具	町田平吉
160 ~ 164	E160 ~ 164	薙刀、弓など武具	町田平吉
166 ~ 185	E166 ~ 185	采配、陣笠、竹刀など武具	町田平吉
191 ~ 192	E191 ~ 192	弓籠手、将棋	町田平吉
197 ~ 206	E197 ~ 206	日本で収集した朝鮮の民具資料	197 ~ 205は尹雄烈
214	E214	壺	松原夫人
230 ~ 231	E230 ~ 231	葎山笠・具足	町田平吉
242 ~ 243	E242 ~ 243	足袋・鼻緒	
245	E245	[引合帳]	
252 ~ 259	E252 ~ 259	食器類	
262	E262	油徳利	
264	E264	藁入れ	
265	E265	風呂敷	竹中
425	E425	[バイオリン]	高嶺夫人
453	E453	急須	E445 ~ 458関連資料
463	E463	□itei	ビゲロー
464	E464	機織道具	モリオカ キンジロウ
466	E466	アイヌ 衣服	
468 ~ 469	E468 ~ 469	アイヌ スプーン	E470関連資料 ヒライ コウシロウ
480	E480	鎖帷子	
483 ~ 488	E483 ~ 488	アイヌ関連資料	ヒライ コウシロウ
491	E491	アイヌ関連資料	ミヤケ
495	E495	花簪	
506	E506	綿入れ	竹中
529 ~ 639	E529 ~ 639	刀剣・鐔・小柄など	[町田平吉]
651	E651	盃台と盃	
667 ~ 670	E16306 ~ 16309	生き人形 武士の家族	
671 ~ 672	E16310 ~ 16311	生き人形 農夫と農婦	
673	E16312	[生き人形 サムライ]を削除	記入後、線で消す
682 ~ 683	E682 ~ 683	アイヌ関連資料	町田平吉
723	E723	[筆]	松原

### 3 『日本その日その日』との照合

本調査報告書モース・コレクション目録と上記【表2】により、1882年のモース自身による博物館のための収集品はおおよそ概観できる。次に、それほど多くない『日本その日その日』の博物館のための収集の記述と重ね合わせ、分析を試みていくこととしよう。同書に見られる該当の記述は、全て東洋文庫版で言えば第3巻で下記の通りである。

①私の部屋は実に乱雑を極めていゝる。集った陶器、セーラム博物館のための人類学上の標本、雑記帳、絵画等が、寝台と書卓を入れるにさえ決して大き過ぎはしない、小さな部屋に押し込んである。図709は書卓から見た私の部屋の、ざっとした写生である。<sup>14</sup>

②私は彼等呼び入れて紙と鉄とを渡した。彼等が人形や鶏や鷺やその他を切りぬく巧な方法は、驚くばかりであった。私はそれ等をすべて取っておいた。それはセーラムの博物館へ行くのである。<sup>15</sup>

③町田氏が、人力車にいっぱい武器を積み込んでやって来た。長い槍、各種の武具、軍隊信号に使用する扇、見事な弓と十二本の矢を入れた箭筒、撃剣に使用する刀、槍その他すべての道具等がそれで、セーラムのピーボディー博物館のために、私にくれた。<sup>16</sup>

④私が既に数回あつてゐる朝鮮人の父子が、暇乞に来た。父親が間もなく朝鮮へ帰るのである。子供の方が日本語を話すので、我々はうまい具合に会話を交えたが、私が父親に向つて、別に大した必要もない朝鮮の品で、博物館のために私にくれるような物は無いかと聞こうとするに至つて、行きつまつて了つた。これは私の日本語では云い得ぬことだつた。それでしばらくまごつた揚句、日本人の友人を呼んで通弁して貰つた。彼は、彼の部屋に何かあるかどうか、見て見ようといつた。昨夜、八種の異なる品物が私に与えられた。それ等は皆朝鮮の品で、いずれも興味がある。<sup>17</sup>

⑤アイヌの布や衣類をさがしてゐたら、永代橋の向うにある、ある場所へ行くといつたといわれた。長い時間をついやし、何度も路を聞いた上、その家を見出すと、人々は私にアイヌの前掛その他を見せてくれた。値段を聞くと、只でくれるといつて聞かぬ。それ等はピーボディー博物館へ行くのだといつても、同じことである。更に彼等は、十二月十九日来れば、別のアイヌの品も見せるといつた。それで今日また行くと、彼等はアイヌの着物と、脛当てと、針箱と、もう一つの前掛とを出して見せた。が、又しても彼等は断じて売ろうとせず、それ等を私に、ピーボディー博物館への贈物としてくれた。<sup>18</sup>

磯野直秀氏作成の「モース年表」<sup>19</sup>と照らし合わせると、上記の記述はすべて1882年（明治15）11月から12月頃のことと判断される。モースの3回目の来日での滞在は、同年6月4日から翌年2月14日ま



での8か月間であった。モースは、「館長業務報告」では、日本の訪問の目的は博物館のための資料収集にあったと書いたが、『日本その日その日』を読む限りでは、その目的は個人コレクションの日本陶器の蒐集と人々との交流に力点があったと思わざるを得ない。博物館のための収集は、1882年の後半に大きく進展した。

引用した『日本その日その日』の記述のうち、①については、同部屋のスケッチがピーボディ・エセックス博物館のモース文書のなかに残されている。②については、「料理番の小さな女の子とその遊び仲間」によるものだが、該当の資料については見出せていない。ただ、E209及びE65906～E65911のジョウジロウ寄贈の「型紙又は押絵」が可能性としてあるのではないと思われる。③の「町田氏」とは、武具商の町田平吉<sup>20</sup>で、町田から寄贈された武具関連コレクションはE153～E192、E230～231、E529～639、E682～683と、E724に至るまでに計155点にも上る。

興味深いのが④の記述で、「既に数回あっている朝鮮人の父子」とは、朝鮮から大韓帝国にかけての政治家として知られる尹雄烈（1840～1911）・尹致昊（1865～1945）父子のことである。息子の尹致昊は朝鮮初の日本留学生の一人として留学中で、父の尹雄烈は同年の壬午の変（壬午軍乱）により日本に亡命中であった<sup>21</sup>。モースの通訳としても活躍した宮岡恒次郎（竹中八太郎（成憲）の実弟）が尹致昊と学校の同級で、モースの話した英語を宮岡が日本語に訳し、尹致昊が日本語からハングルに訳し父の尹雄烈に伝えるというリレー通訳によって数度にわたっての面会の交流が行われた<sup>22</sup>。そのなかでモースは博物館のための資料を尹雄烈に請い、尹からモースへ煙管や櫛、鉢巻きなどの身の回りの品々（E197～E205）が渡されたのだ。

⑤のアイヌ関連資料は、コレクション目録及び【表2】より、ヒライコウシロウなる人物からの寄贈品11点がE468～470、E481～488に入っている。

以上をまとめると、【表3】のようになる。

【表3】1882年末頃の収集品

寄贈者・寄贈資料	Eナンバー	文献資料
町田平吉による武具関連資料	E153～E192、E230～231、E529～639、E682～683	『日本その日その日』③p.165
尹雄烈による寄贈資料	E197～E205	『日本その日その日』③p.165
（東京教育博物館からの道具コレクション）	E286～E420、E426～E428	「館長業務報告」
ヒライコウシロウによるアイヌ関連資料	E468～470、E481～488	『日本その日その日』③p.185上

収集の番号、後のEナンバーは、必ずしも寄贈された日にち順に正しく番号が付与されたわけではないと考えられるが、1882年11月から12月にかけてはおおよそE150からE500ぐらいのまとまった資料がモースの手元に集まったことがうかがえよう。さらに『日本その日その日』ではほとんど触れられてはいないが、「館長業務報告」の冒頭で紹介された東京教育博物館（現・国立科学博物館）からの「日本の産業を示す道具の大量のコレクション」138点—大工道具、鍛冶屋道具、桶屋道具<sup>23</sup>等のEナンバー

もこの範囲のなかにあった。

年が明けて1883年1月から2月にかけては、講演をしたり、梅若に謡を習い始めたり、人々との送別の会を行ったりもするが、資料の収集活動については触れられていない。モースが『古事記』『日本書紀』などの和書637点を購入したと新聞の報道<sup>24</sup>があるものの、1882年のうちにおおよその民俗資料は収集できていたのかもしれない。

#### 4 初期モース・コレクションへの協力

今後、資料と自筆収集目録とをより丹念に突き合わせて見てゆけば、さらに『日本その日その日』との接点も見出され、モースの収集活動や足跡が明らかとなるであろう。初期の博物館のためのコレクションは、前章で見た通り、大半については明治の東京で人々の助けを得ながら形成された。そのために農耕具に関する収集がないことは、すでに指摘がある通りである。今後の研究のアプローチの上で、日本側の私たちにとって何よりも助けとなるのが、672番までの自筆収集目録に書かれたローマ字表記の日本語資料名で、それは1点1点について、モースの収集の助手を務めた竹中八太郎（成憲）が付与したものであった。モースの自筆による資料名を1点1点読み進めていくと、1882年東京の竹中の言葉がそこに残されている。

例えば、E105 Zai「ざい」（采）は、はたきをいう。E129 Menchi「めんち」とは面子のことをいう。E151 Samisen「三味線」。さらに「ヒ」と「シ」の発音の混同もある。E471 Shoshi「しょうし」は拍子木、E498、E500～501 Shitoemono「しとえもの」は単物（ひとえもの）と、竹中の発音がそうであったことをうかがわせる。東京大学の「天文観測所のすぐ裏にある小さな家の」<sup>25</sup>モースの部屋にて、東京大学の医学生であった竹中が真面目に入念に1点ずつ確認して言及し、モースがそれを筆記した様子がつぶさにうかがえ、頭が下がる思いがする。

「館長業務報告」でも功績をたたえたが、モースは竹中に全幅の信頼を寄せていた。それは『日本その日その日』の1882年の記述にも垣間見え、3回目の来日にて2人の間の会話が増えていたようだ。

竹中は私にいろいろ面白いことを話してくれる。我国の諺なり格言なりをいうと、彼は日本に於る同様なものを挙げる。<sup>26</sup>

友人竹中は、私のもとめに応じて、夏休中に、下層階級の間に行われる迷信と習慣とを、いくつか集めて記録した。彼は時々、私が執筆出来ぬ程つかれていない時に、手帖から読んで聞かせる。<sup>27</sup>

竹中は、モースの日本の人々と暮らしへの理解と考察を深めるのに大きく貢献したのだった。このことはモースの執筆や講演活動、モース・コレクションの拡充、ピーボディ博物館での日本展示の形成へもつながる重要な根幹部分であった。さらに竹中は、着物や火鉢、箒や迷子札<sup>28</sup>などの家で使っていた品々の寄贈も行い、博物館のための収集品に厚みが出るよう手助けをした。この寄贈についてもモース

は感謝の気持ちを「館長業務報告」に表した。

モース・コレクションの形成はモース一人でなし得たものでない。竹中ら誠実で優秀な日本の人々が支えたもので、そのことは自筆収集目録という本資料からも如実に読み解けるのである。

## おわりに

本稿ではモース文書のうち、「自筆収集目録」のみを取り上げ、『日本その日その日』との接点を探る試みを行った。今後、モース文書に残される他の文書についても詳細に検討し、文書や手紙との照合の作業も必要であろう。同時に博物館に収蔵される民具資料をつぶさに調査することにより、収集に関わる資料や人々との交流も見出せる部分が多いのではなかろうか。そのことにより、他にはない貴重な日本コレクションの解明とわが国あるいは東京に残らなかった「モノ」たちへのアプローチが進むとともに、モースその人の視点及び周囲の協力者の足跡もより正確に理解がなされるようになるであろう。

本稿の執筆にあたっては、故守屋毅氏による研究が大きな教示となり、その成果のほんの一部である部分の継続を意識して、記述を行った。国立民族学博物館を中心に行われた共同研究から40年近くが経とうとするなか、同コレクション研究が今後さらに継続し深まることを切に願っている。

## 【註】

- 1 守屋毅編『共同研究モースと日本』小学館、1988年
- 2 *Annual Reportsof the Trustees of the Peabody Academy of Science 1874-1884*, pp.47-51, 1855
- 3 前掲書 pp.358-364
- 4 前掲書 pp.364-369
- 5 小林淳一『海を渡った生き人形—ペリー以前以後の日米交流』（朝日選書633、朝日新聞社、1999年）p.16にピーボディ・エセックス博物館の収蔵品台帳の写真が掲載される。今後、本目録及び守屋氏が言及される数種類の目録、ならびに収蔵品台帳の調査研究により、目録の検討がなされるべきであろう。
- 6 ピーボディ・エセックス博物館フィリップス図書館オンライン目録 (<https://pem.as.atlas-sys.com/repositories/2/resources/182> 2022年1月時点) より。なお、本稿脱稿後に、同文書「VI. Ethnology A. Japan」(Box.48, Folder.47) にも同種の目録があると判明した。
- 7 守屋編、前掲書 p.364
- 8 本目録冒頭のメモのなかに、「Cake and whisky for Mr. Machida 1.35」と記載がある。町田平吉にケーキとウィスキー（計1円35銭）を謝礼に贈ったものと推察される。
- 9 例えば、本目録番号667～673の生き人形について、「125.00 packing 50」と書かれる。「125.00」はモース文書に含まれる生き人形の領収書（日本橋区堺町一番地 斉木次郎兵衛）の金額125円と一致する。領収書の全文は、守屋編、前掲書p.377に掲載される。他の資料については、例えば番号2の雑巾は「0.3」と記され、資料から見ても購入品とも購入した額とも考えづらく関税計算のための評価額と推察される。
- 10 博物館に収蔵された、最終的なモース自身の収集品（日本コレクション）は2,880点ほどと考えられる。詳しくは、



拙稿「モース・コレクションの形成とその背景」『明治のこころ—モースが見た庶民の暮らし』（小林淳一ほか編、青幻舎、2013年）pp.32-35を参照されたい。

- 11 日本で収集の助手を務めた竹中成憲の筆記とは一致しない。また、モースの秘書のマーガレット・ブルックスの筆記とも異なる。
- 12 “To Mr. Takanaka Hachitaro (筆者註 原文ママ), who was my constant companion, great credit is due for the careful way in which the Japanese names were secured for all the objects collected.”, 註2前掲書
- 13 生き人形の受入れは、1883年7月1日。小林、前掲書p.16掲載の受入台帳にも記載されるという。
- 14 E・S・モース『日本その日その日』3巻 東洋文庫179 平凡社、1971年、p.153下
- 15 モース 前掲書 p.159上
- 16 モース 前掲書 p.165上
- 17 モース 前掲書 p.165上
- 18 モース 前掲書 p.185上
- 19 磯野直秀「モース年表」守屋編、前掲書pp.465-491
- 20 町田平吉の店舗は、浅草区南松山町四十一番地（現・台東区元浅草4丁目）にあった。町田がモースに寄贈を行ったのは、ビゲローが自身のコレクション蒐集のため1882年に町田から大量の刀剣を購入した経緯があった。
- 21 1882年9月1日に東京着。息子の尹致昊は京橋区山城町（現・中央区銀座6丁目）に下宿していた（「読売新聞」1882年（明治15）9月1日朝刊 1面記事）。
- 22 宮岡恒次郎は、その後、尹致昊の紹介により、17歳で朝鮮国訪米使節団一行にパーシバル・ローウェルの秘書通訳として随行した（李漢燮「朝鮮の遣米使節団における通訳の問題について—1883年の遣米使節団の例を中心に—」([http://www.princeton.edu/~colcutt/doc/HanSop\\_Japanese](http://www.princeton.edu/~colcutt/doc/HanSop_Japanese) 2022年1月時点))。宮岡は東京大学卒業後、外交官となり活躍した。
- 23 当館「明治のこころ」展でも、東京教育博物館からの寄贈品を多数里帰りさせ、展示した。前掲図録、pp.144-161参照
- 24 「読売新聞」1883年（明治16）2月4日朝刊 1面記事
- 25 モース 前掲書 p.46下
- 26 モース 前掲書 p.58上
- 27 モース 前掲書 p.127上
- 28 火鉢はE513（前掲図録 p.135掲載）、箒はE647（同、p.88）、迷子札はE268（同、p.110）でモース前掲書p.216にモースによる図版も掲載される。

